
混沌1組

9

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

混沌1組

【コード】

N8354I

【作者名】

9

【あらすじ】

特異点が集まればいいよというアイデア倒れになりそうな話

魔王、入学

暖かな陽射しが新たな季節の訪れを感じさせる、四月の上旬。

俺は今日からここ、彩王学園へと通うこととなった。

二年前に出来た私立の新設校であり、

設備も新しく充実しているし、学園祭や体育祭などのイベントにも熱が入っているという。

中学時代からの友人が一人も同じ進路を選ばなかったことに若干の不安を抱えながらも、

それよりも遥かに大きな期待に胸を膨らませ、

「愛内青葉です、一年間よろしくお願ひします」

体育館で何やら面倒な式が終わった後の、教室に戻っての自己紹介タイムで。

今まで生きてきた中で一度たりとも出席番号一番を逃したことはない自分の名を紹介する。

こういうのは最初は下手にネタに走らず無難な挨拶に留めておくに限る。

特に俺にはクラス内に知人が居るわけでもなく、早々にハブられてもすれば健全な高校生活への復帰の機会はそうそう与えられないのだから。

「よろしくな愛内ー。じゃあ次ー、出席番号2番、闇野颯真」

担任の学屋勉先生（28歳独身）が、次の名前を読み上げる。

あんのそうま、か。庵野とか安野とでも書くのかな？

「む、我輩の番か。しかし、せっかく我輩に相応しくかつ出席番号1番を取れそうな名にしたというのに、まさか愛内とはな」

あれ？おかしくね？ここ、高校一年生の教室ですよな？

何故俺の背後から、若本則夫ボイスが聞こえてくるというのだろうか？

「我輩の名は闇野颯真、魔王だ」

思わず振り向くと、そこには。

「我輩は、1番が我が手中に納まらねば気が済まん。
1年1組出席番号1番、愛内青葉よ。我輩の下僕となれ」

ゴテゴテの鎧の上に学生服を羽織り角の生えた兜を被った、青い
皮膚に阿修羅の形相の、巨漢のオッサンがいた。

黒魔法フア

俺は固まった。そりゃもう、冬のロシアの屋外で一晩放置したバナナのように。

「聞こえなかったのか？我が配下となれ、愛内青葉よ」

自称魔王の魔への誘い。どうするよ、俺。

これはもしかや庵野君（仮）なりのジョークなのだろうか。それにしても、やけにリアルな鎧や兜だが。

ジョークなのだとすれば、ほどほどにネタにノってあげつつお断りしておくのがベターな答えだろう。

「ごめん、庵野（仮）。俺は悪に魂は売れないよ」

「そうか、残念だ」

刹那、自称魔王の振り上げた掌に紫色の光が収束し

「ならば貴様を消し、我が輩が出席番号1番となるまでだ」

メギ ラオン

視界一杯に広がる、核熱の光。避けられない絶対的な『死』が迫り……

「破あー!!」

叫び声と共に現れた青白い光が、魔王庵野（仮）の生み出した爆発を相殺する。

「おいおいおいおいフザケてんのかコラ……」

叫び声の主は、斜め後ろの席。軽くサングラスのように色の入った眼鏡を掛けた、坊主頭の男。

「そこはメギ ラオンじゃなくてイ ナズ……」

「そこじゃねーだろ、ボケー!!」

命の恩人に対しても、思わず叫んでしまうような恐怖と興奮に囲まれながら。

俺の非日常が、ここから始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8354i/>

混沌1組

2011年10月6日05時37分発行